

沖縄陸軍病院

沖縄陸軍病院(球18803部隊)は1944(昭和19)年5月に熊本で第32軍の陸軍病院として編成された。6月から那覇市内で活動が始めたが、同年10月10日米軍の空襲によって施設が焼失し、南風原国民学校校舎に移転した。それ以降、第32軍野戦築城隊の指導のもとで、字喜屋武(黄金森)と字兼城(現在の役場北側の丘)に約30の横穴壕が造られた。米軍の艦砲射撃が始まった1945(昭和20)年3月下旬陸軍病院は各壕へと移った。広池文吉病院長以下、軍医、看護婦、衛生兵ら約350人に加えて、3月24日には沖縄師範学校女子部・県立第一高等女学校の生徒(ひめゆり学徒)222人が教師18人に引率され、看護補助要員として動員された。

4月1日の米軍上陸後、外傷患者の激増に対応する為、外科を第一外科、内科を第二外科、伝染病科を第三外科へと改めた。5月下旬、第32軍司令部は摩文仁(糸満市)へ撤退を決定し、陸軍病院に撤退命令が出された。その際、重症患者に青酸カリが配られ、自決の強要が行われた。

南風原町は1990(平成2)年戦争の悲惨さを伝える証として、第一外科壕群・第二外科壕群を町の文化財に指定した。



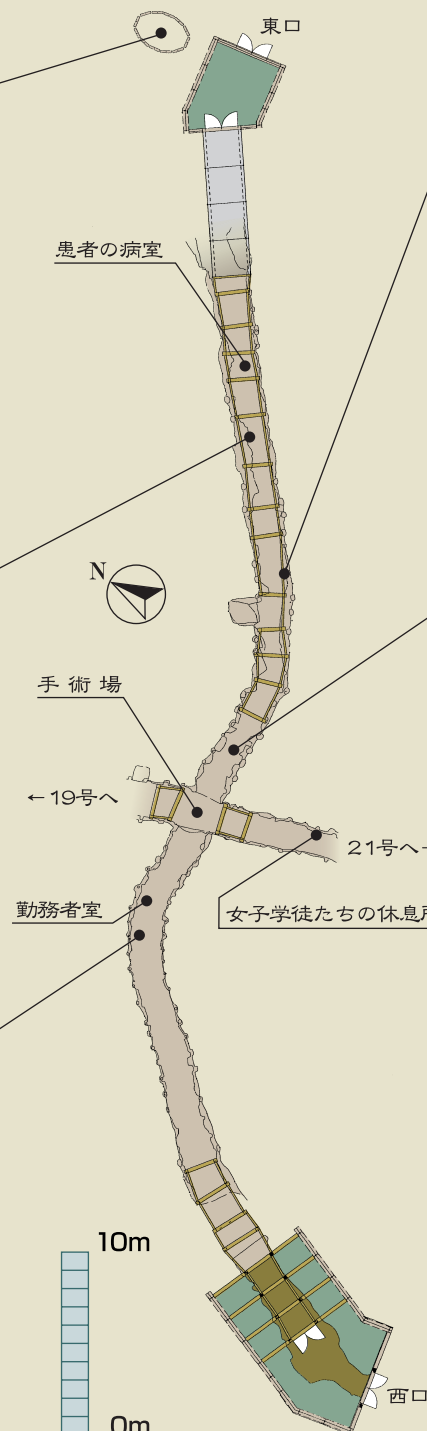
埋められた医薬品類
地中に多数の医薬品類が隠すように埋められていました。



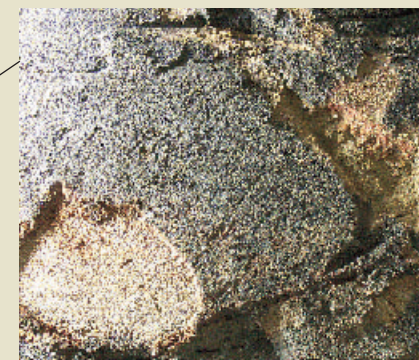
入院患者のものと思われる
石鹸箱・筆箱・防毒マスクの吸収缶



焼け残った坑木
黒く焼けた坑木や壁、天井は米軍の火炎放射器によるものと考えられています。



発掘された人骨(腕の骨など)
十字路から東口までの右側壁沿いには幅約90cmの棚が二段あり、患者の病室として使われました。



天井に刻まれた文字「姜」ほか
入院していた朝鮮人兵士が刻んだものと見られています。

20号は長さ約70mの人工の横穴壕で、高さは約1.8m、床幅1.8mです。

第二外科の中心的な壕で、東側が患者の病室、中央部が手術場、西側が勤務者室として使用されました。

(2007年6月18日から一般公開)